

「聖書日課」と分かち合い
5月16日(月)～5月22日(日)

(文責・岩崎秀子)

●5月16日(月)使徒言行録24:27～25:12 皇帝への上訴

24:27 さて、二年たって、フェリクスの後任者としてポルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。

25:1 フェストゥスは、総督として着任して三日たってから、カイサリアからエルサレムへ上った。

25:2 -3 祭司長たちやユダヤ人のおもだった人々は、パウロを訴え出て、彼をエルサレムへ送り返すよう計らっていただきたいと、フェストゥスに頼んだ。途中で殺そうと陰謀をたくらんでいたのである。

25:4 ところがフェストゥスは、パウロはカイサリアで監禁されており、自分も間もなくそこへ帰るつもりであると答え、

25:5 「だから、その男に不都合なところがあるというのなら、あなたたちのうちの有力者が、わたしと一緒に下って行って、告発すればよいではないか」と言った。

25:6 フェストゥスは、八日か十日ほど彼らの間で過ごしてから、カイサリアへ下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロを引き出すように命令した。

25:7 パウロが出廷すると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちが彼を取り囲んで、重い罪状をあれこれ言い立てたが、それを立証することはできなかった。

25:8 パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはありません」と弁明した。

25:9 しかし、フェストゥスはユダヤ人に気に入られようとして、パウロに言った。「お前は、エルサレムに上って、そこでこれらのことについて、わたしの前で裁判を受けたいと思うか。」

25:10 パウロは言った。「私は、皇帝の法廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。よくご存じのとおり、私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていません。

25:11 もし、悪いことをし、何か死罪に当たることをしたのであれば、決して死を免れようとは思いません。しかし、この人たちの訴えが事実無根なら、だれも私を彼らに引き渡すような取り計らいはできません。私は皇帝に上訴します。」

25:12 そこで、フェストゥスは陪審の人々と協議してから、「皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとに出頭するように」と答えた。

*イエスさまが死刑になるかどうかを決定したのは、ユダヤ総督ピラトであったように、パウロの裁判においても、ローマ帝国のユダヤ総督やユダヤ人たちが裁判に影響力を持ちました。国家とキリスト教の政治的な背景が見えてきます。パウロによるローマ皇帝カエサルへの上訴は、そのような状況下で行われました。国家と宗教の争いは、いつの世においても変わらないことがわかります。

●5月17日(火)使徒言行録25:13～22 パウロの主張

25:13 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。

25:14 彼らが幾日もそこに滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して言った。

「ここに、フェリクスが囚人として残っていた男がいます。

25:15 わたしがエルサレムに行ったときに、祭司長たちやユダヤ人の長老たちがこの男を訴え出て、有罪の判決を下すように要求したのです。

25:16 わたしは彼らに答えました。『被告が告発されたことについて、原告の面前で弁明する機会も与えられず、引き渡されるのはローマ人の慣習ではない』と。

25:17 それで、彼らが連れ立って当地へ来ましたから、わたしはすぐにその翌日、裁判の席に着き、その男を出廷させるように命令しました。

25:18 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について、わたしが予想していたような罪状は何一つ指摘できませんでした。

25:19 パウロと言い争っている問題は、彼ら自身の宗教に関することと、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。

25:20 わたしは、これらのことの調査の方法が分からなかったので、『エルサレムへ行き、そこでこれらの件に関して裁判を受けたくはないか』と言いました。

25:21 しかしパウロは、皇帝陛下の判決を受けるときまで、ここにとどめておいてほしいと願い出ましたので、皇帝のもとに護送するまで、彼をとどめておくように命令しました。」

25:22 そこで、アグリッパがフェストゥスに、「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」と言うと、フェストゥスは、「明日、お聞きになれます」と言った。

* 告訴人たちはパウロに関する罪状を何ひとつ指摘できませんでした。パウロとの争点は、告訴人自身の宗教に関すること、そして死んでしまったイエスが生きているとパウロが主張していることでした。この時パウロが主張したイエスさまは、現代においてもなお変わらずに私たちの心の中で生き続けてくださっていることを、神さまに感謝いたします。

●5月18日（水）使徒言行録 26:1～11 アグリッパ王の前での弁明

26:1 アグリッパはパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と言った。そこで、パウロは手を差し伸べて弁明した。

26:2 「アグリッパ王よ、私がユダヤ人たちに訴えられていることすべてについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いですと思います。

26:3 王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるよう、お願いいたします。

26:4 さて、私の若いころからの生活が、同胞の間であれ、またエルサレムの中であれ、最初のころからどうであったかは、ユダヤ人ならだれでも知っています。

26:5 彼らは以前から私を知っているのです。だから、私たちの宗教の中でいちばん厳格な派である、ファリサイ派の一員として私が生活していたことを、彼らは証言しようと思えば、証言できるのです。

26:6 今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。

26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。

26:8 神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。

26:9 実は私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。

26:10 そして、それをエルサレムで実行に移し、この私が祭司長たちから権限を受けて多くの聖なる者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしたのです。

26:11 また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」

* アグリッパ王の前でパウロは弁明をします。パウロは、かつてユダヤ教の中でいちばん厳格なファリサイ派の一員であったのであり、ナザレの人イエスがメシアだとはわからずにイエスを冒瀆し、聖なる者たちを罰して迫害したのでした。しかし、イエスさまこそが旧約の神がお与えになった約束の実現なのであると信じたことで、罪に問われました。キリスト教においては、神さまのお導きは旧約聖書から綿々と続いているのだということがよくわかります。

●5月19日（木）使徒言行録 26:12～18 あなたを証人にするために

26:12 「こうして、私は祭司長たちから権限を委任されて、ダマスコへ向かったのですが、

26:13 その途中、真昼のことです。王よ、私は天からの光を見たのです。それは太陽より明るく輝いて、私とまた同行していた者との周りを照らしました。

26:14 私たちが皆地に倒れたとき、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う』と、私にヘブライ語で語りかける声を聞きました。

26:15 私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

26:16 起き上がれ。自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。

26:17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。

26:18 それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。』」

*パウロの回心の様子が語られます。天からの光を見た後に、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。」という声が聞こえます。並行箇所として使徒言行録9：4、22：7でも同じ言葉で問いかけられます。そしてイエスはパウロに、パウロを奉仕者として、また証人として、「この民と異邦人の中から救い出して彼らのところへ遣わす。」と告げられます。私たちが教会で奉仕をし、証をします。それは、私たちがまたパウロのように、イエスさまによって救われた者である、ということの意味しているのです。

●5月20日(金) ルカ21：12～13 証しする機会

21:12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。

21:13 それはあなたがたにとって証しをする機会となる。

*イエスさまが語られた、「これらのことが、すべて起こる前に」は、神さまのご計画は不可避であるということの意味しており、後に使徒言行録には、イエスさまの弟子たちがユダヤ人の会堂や神殿で裁判にかけられた様子が記されています。しかしこうも語られます。「あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなる」と。これは「何も心配することはない」という意味だろうと思います。私たちは、忍耐をもって、命である信仰をお捧げしたいと思わされます。

●5月21日(土) テモテニ2：8～10 神の言葉はつながれない

2:8 イエス・キリストのことを思い起こしなさい。わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたのです。

2:9 この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。

2:10 だから、わたしは、選ばれた人々のために、あらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。

*「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。」と、パウロは力強く語ります。この福音のために、身体を鎖につながれているパウロですが、「神の言葉はつながれていない」という言葉を、私たちは真摯に受け止めたいと思います。あらゆることを耐え忍んでくれたパウロにより、福音につながるすべての人が、救いと栄光とにあずかることができるのです。

●5月22日(日) 使徒言行録26：19～32 鎖につながれながら

26:19 「アグリッパ王よ、こういう次第で、私は天から示されたことに背かず、

26:20 ダマスコにいる人々を初めとして、エルサレムの人々とユダヤ全土の人々、そして異邦人に対して、悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。

26:21 そのためにユダヤ人たちは、神殿の境内にいた私を捕らえて殺そうとしたのです。

26:22 ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。

26:23 つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」

26:24 パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」

26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。

26:26 王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったものではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。

26:27 アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」

26:28 アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」

26:29 パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」

26:30 そこで、王が立ち上がり、総督もベルニケや陪席の者も立ち上がった。

26:31 彼らは退場してから、「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と話し合った。

26:32 アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。

*尋問のあと、ユダヤのアグリッパ王は、ローマ総督のフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ釈放してもらえただろうに。」と言います。しかし、もしパウロがローマ皇帝に上訴していなければ、ほぼ確実に抹殺されてしまったであろうと思われます。鎖につながれながらもパウロは、世界中の人々に、そして現代に生きる私たちにも、「悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするように。」と語ります。私たちは改めて、このみ言葉にふさわし信仰生活を送っているかを真摯に振り返りたいと思います。